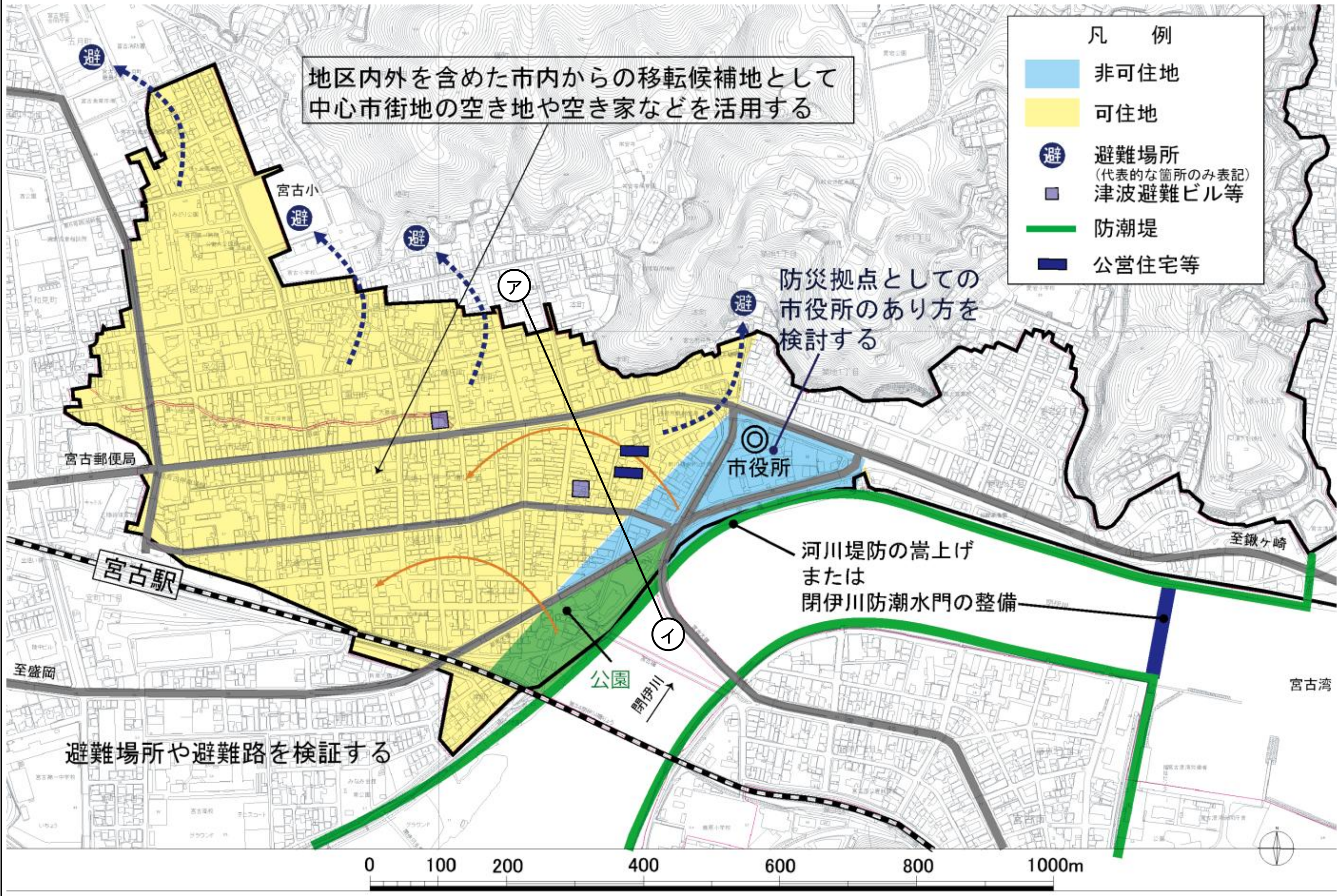
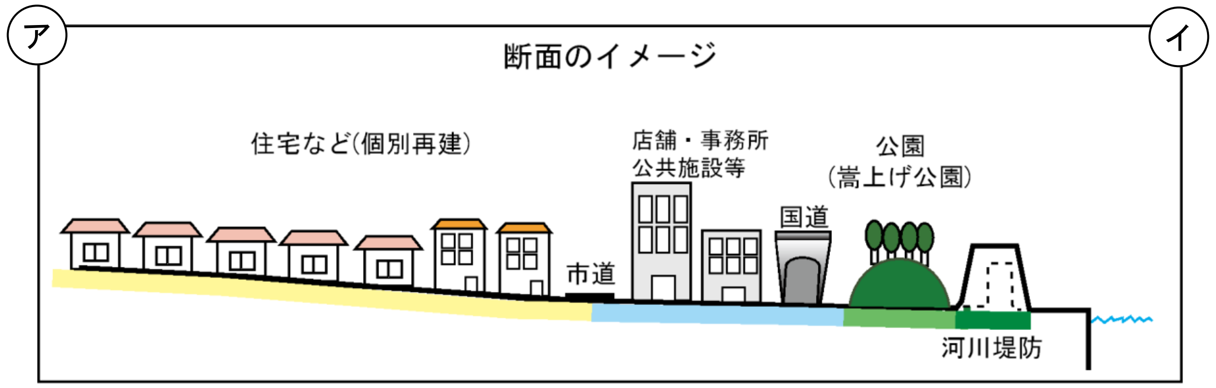
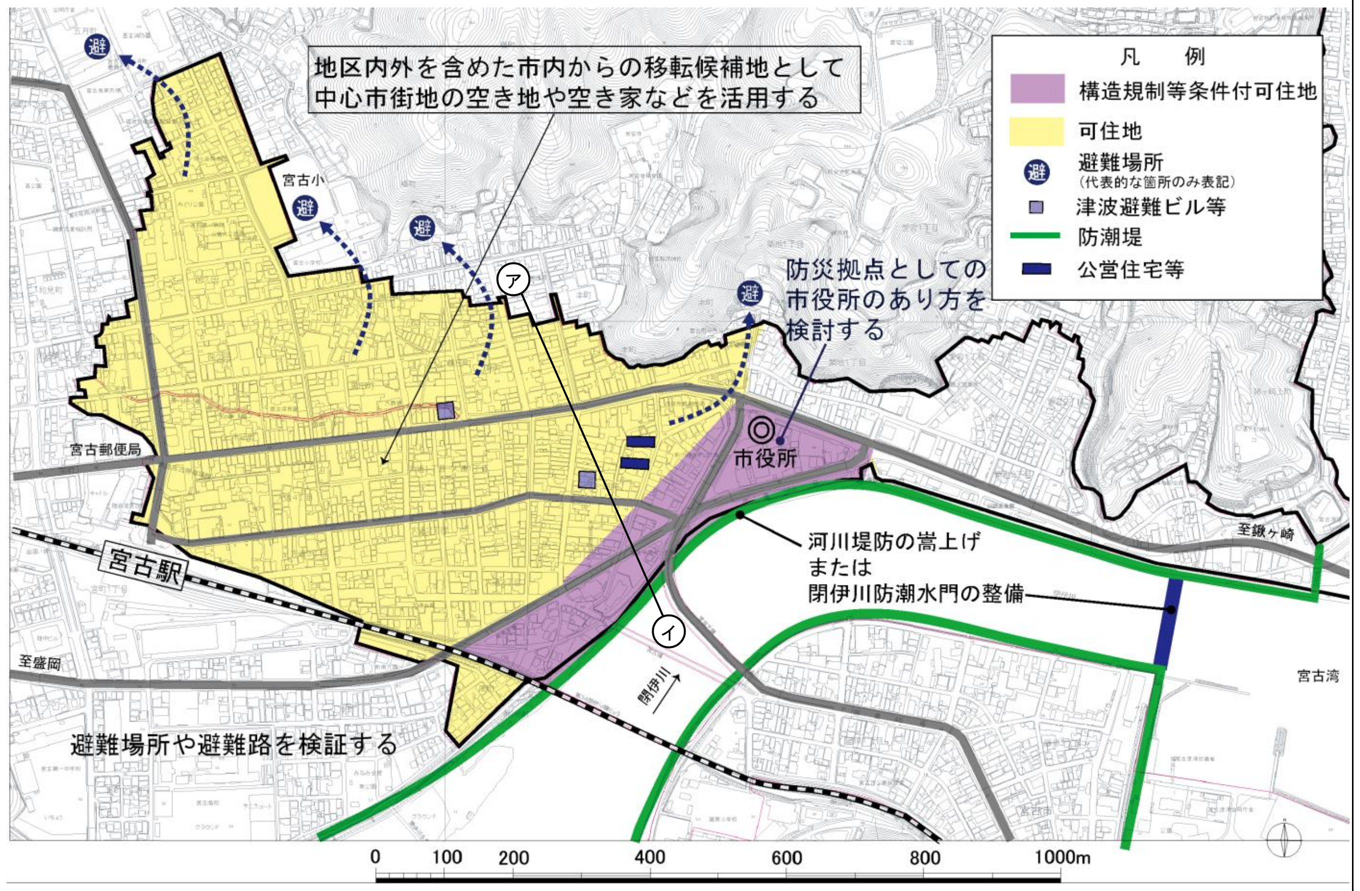
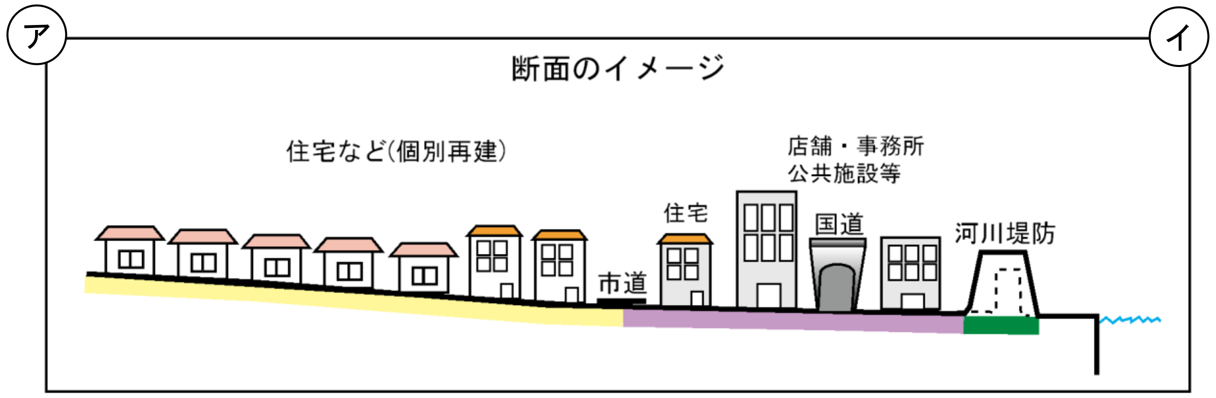
■中心市街地の復興パターン案について

<table>
<tr><td colspan="2">被害の状況</td><td colspan="2">・ 河川堤防を越流した津波が市街地を襲い、広い範囲で被害を受けた。
・ 浸水面積は 48.4ha にわたり、浸水高は TP+3.3～5.2ｍとなり、最大浸水深が 3.9ｍに達した。
・ 浸水区域内の建物の 14.8%が流失または撤去となる被害を受け、特に閉伊川に近い区域での被害が大きかった。</td></tr>
<tr><td colspan="2">復興まちづくりの考え方</td><td colspan="2">・ 比較的頻度の高い津波※1 に対しては、防潮堤等のハード整備により防ぎ、今後、起こりえる最大クラスの津波※2 に対しては、ハード整備とソフト対策を組み合わせた多重防災型まちづくりを行う。
・ 住宅地は、予想浸水深※3 の大きい区域を高台等への移転による確保を検討するとともに、小さい区域は、予想される建物被害の状況に応じ現地再建及び建物の構造規制を組み合わせる。
・ 非可住地であっても、安全に避難できるよう避難路の整備や津波避難ビル等の整備を行う。
・ まずは被害の大きい区域の復興まちづくりを進める。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">復興パターン案</td><td>イメージ図</td><td>案Ａ：河川堤防付近は非可住とし、中心市街地の空き地、空き家、市内の高台へ移転




</td><td>案Ｂ：河川堤防付近は構造規制により津波に強い建物整備を促進し、一部住宅については中心市街地内の空き地、空き家に移転




</td></tr>
<tr><td>特　　徴</td><td>・ 非可住地となる区域がある。
・ 非可住地は、中心市街地や周辺の高台などへの移転が必要となる。</td><td>・ 構造規制を受ける区域があるが、多くの方が現地で再建できる。</td></tr>
</table>

※１ 概ね数十年から百数十年に一度程度で発生すると想定される津波　※２ 今回と同様の津波　※３ 今後、起こりえる最大クラスの津波により予想される浸水の深さ